

鶴見和子における地域社会の公共徳倫理としての受苦と共生の思想：内発的発展論から内発的キー・パーソン論へ

丹羽一晃（東京農工大学大学院連合農学研究科）

発表要旨

これまで一般的に比較社会学者¹として紹介される鶴見和子の思想において、共生という概念は、鶴見の研究人生において重要な主題のひとつとして熟慮されてきた。それは、彼女自身が「自然と人間の共生ということはずっと考えてきました」（鶴見 1998、pp. 28-29）と述べていることからわかるように、鶴見の思想における共生の重要性が窺える。そこで、本発表では、共生という概念を、自然と人間の関係を含めた現代的意味における他者たる存在同士の関係の様々な対立緊張をいかにして乗り越えられうるのか、という意味において使用する。

本発表では、鶴見和子における受苦と共生の思想とは何かについて、晩年の彼女の思想の最終到達点を参照することによって明確にし、新たに位置付け直すことを試みる。さらに、彼女が受苦と共生の思想に至るまでに編み出した、内発的キー・パーソン論を描き出すことにより、鶴見における受苦と共生の思想をより深く考察する。そして、公共徳倫理という視座から、彼女の思想に再び光を当てることで、鶴見における受苦と共生の思想の輪郭を浮かび上がらせる。そのために、現状の鶴見研究における限定された射程を拡大し、より広範な可能性を明確にする。そうすることで、鶴見の思想が共生社会の実現に向けて貢献しうる可能性があることを提示する。そのために、受苦の思想としての内発的キー・パーソン論についての議論と本発表の位置付けを整理し、その変遷を追う中で立てられた問いについて、鶴見の生い立ち、ならびに彼女の学問的背景と照らし合わせることで答える。そして、公共徳倫理における議論の変遷を参照し、鶴見における公共の概念を明らかにするとともに、鶴見の思想を公共徳倫理における思想潮流の中に位置づけることで、鶴見の内発的キー・パーソン論と公共徳倫理の関係を明らかにする。

参考文献

- 鶴見和子. 1998. 『脳卒中で倒れてから よく生き よく死ぬために』 婦人生活社.
- 丹羽一晃. 2023. 「鶴見和子における環境とケアの倫理としての共生と共育の思想：内発的発展論から内発的脱成長論へ」『共生社会システム研究 17(1)』農林統計出版、pp. 101-116.

¹ 「一般的に」という言葉を使った理由として、鶴見自身が、脳卒中で倒れた、1995年12月24日を「社会学者、鶴見和子の命日」とであると主張しているからである（鶴見 1998、p. 6）。このことから、彼女を「比較社会学者」として紹介してよいものか躊躇したためである。丹羽（2023）では、鶴見を環境思想家として位置付け直している。